

〔研究ノート〕

乾山筆「六首歌」をめぐる

乾山は晩年に江戸に下り、その後、十数年を過ごして、江戸の地で八十一才の生涯を終えました。乾山が江戸に下った動機は明らかではありません。一説に、第四代、輪王寺門跡であった公寛法親王が江戸に帰る際に同行したと考えられています。乾山は兄の光琳とともに、摂関家である二条家に出入を許されていました。公寛法親王は東山天皇の第三皇子として生まれ、東山天皇の姉が二条家の当主であった綱平に嫁いでいますので、公寛法親王は綱平夫人の甥にあたります。

「六首歌」では、乾山が懷紙に書いた六首の和歌に、次のような詞書を添えています。「前輪王准三后御宮の／第三回忌を迎へ奉りて／崇保院の御名を句のかみに／をきて六首の和歌を献すること／寔におそれみおそれみかしこまり奉りて／緒方深省百拝」。この詞書によって、公寛法親王の三回忌にあたり、諡の「崇保院」の文字を折り込んで六首の和歌を詠んだことがわかります。六首の和歌は、「袖の露はまたかわかぬにうききはをみとせの春のけふにむかへて／うつとも夢ともわかすあたにのみ きえなて露の身はのこりけり／ほからかにひらくる花のうてなより るりのひかりやそらにみつらん／うけつきし法のとし火かけたかく あきらけき世をなをやてらさん／いく千とせさかへんものか梅かほり たちはな句ふ玉のみはしは／むさし野の草葉おしなみのへふすも たえぬ御法の花の春風」であり、初句の頭文字を並べれば、「そ、う、ほ、う、い、む」、つまり、「崇保院」になります。よほど親しく交流していなければ、このような追善供養は行わないでしょう。公寛法親王は元文三年(1738)三月十五日に四十二才で亡くなっています。三回忌は、その二年後の元文五年、

乾山が七十八才の年にあたります。

乾山は和歌賛を加えた絵画作品を数多く残していますが、その大部分が三条西実隆の家集である『雪玉集』から選ばれています。『雪玉集』は『碧玉集』、『柏玉集』とともに「三玉集」として、堂上歌人の規範となった歌集です。江戸時代の初期に、御水尾天皇のもとで編纂され、既に、寛文十年(1670)には、京の二条通松屋町の武村市兵衛によって十八冊の版本が刊行されています。『雪玉集』が乾山にとって特別な歌集であり、巧緻艶麗と評される実隆の歌風は、乾山にも大きな影響を与えたと思われますが、乾山の自詠の和歌はあまり知られておらず、「六首歌」は貴重な作品と言えます。第三首の「ほからかにひらくる花のうてなより るりのひかりやそらにみつらん」に詠われた法悦の恍惚感には、乾山らしい浪漫的な情趣が色濃く表れています。乾山自詠の和歌では、酒井抱一が乾山を顕彰する石碑に刻んだ辞世の和歌、「うきこともうれしきことも過ぬれば たゝあけくれの夢計なり」が知られています。この他、庄司又左衛門勝富が自作を中心に交流のあった人物の文章を集成した『洞房語園集』に、乾山の和歌一首と詩語一聯が木版に刷られています。「有明の心ちこそすれさつきのひかりもそひていてぬと思へは」の和歌には、「七十八翁紫翠写」の落款があり、「六首歌」と同じく元文五年の作品になります。ただし、『洞房語園集』の序と跋は、その二年前の元文三年八月に記されていますので、検討の余地があります。しかし、この和歌は、『拾遺和歌集』巻十七に収められた、大中臣能宣の「ありあけの心地こそすれ杯に日かけもそひていてぬと思へは」とほとんど等しく、乾山の自詠とするには躊躇されます。道恕斎と号した

編者の庄司又左衛門勝富は、新吉原の遊郭、西田屋の主人であり、名主を勤めました。「六首歌」は抱一が「歌仙堂主人」、すなわち、西村藐庵に宛てた譲状とともに箱に収められていますが、西村藐庵も新吉原の名主でしたので、抱一をはじめとする新吉原に関係する文化人たちが、乾山芸術を愛好していたことがわかります。

これらは、乾山晩年の資料ですが、乾山の父、宗謙が数多くの歌集を書写していることを思えば、乾山自身も幼い頃から和歌の教養を身につけていたと思われます。『文翰雑編』には、寛文三年(1663)から元禄十年(1697)までの諸家の和歌や詩文が編年されて二十冊に収められています。編者の山本通春は、蒔絵師、歌人として知られた山本春正の次男であり、伊藤仁斎の開いた古義堂の門人でした。なお、乾山の従姉にあたる嘉那が伊藤仁斎に嫁いでいます。同書には、同じく従兄の尾形宗哲、輪王寺宮の公寛法親王の先代にあたる公弁法親王、黄檗僧の月潭道澄など、乾山と関係の深い人物が見出せます。その中に、乾山と同名の「深省」という人物が認められます。巻十九に収録された深省の和歌には、次の詞書があります。「于時 元禄九年丙子曆三月十八日 於履雪軒書之／追悼 深省／有為転変の世のならひたれもかくとは／しりながらこし五月の下の七日に塵／の浮世の夢さめて消にし事も今更に／

思ひなしつゝかなしさよ□□も八十の齡／にも長き別の涙川に跡もいまはぬれ／そほちなれし昔の床までもみるに哀／そまさりける 我も年比睦き人にしあれば／御仏の御名を句毎の上に置つゝ□／まそつらねつゝ西誉艸屋知靖比丘尼／となりにしことをいたみ侍るものならし」。この詞書によって、深省が元禄九年の三月十八日に、「履雪軒」において、「西誉艸屋知靖比丘尼」を追悼するために、「御仏の御名を句毎の上に置つゝ」、詠んだ和歌を書いたことがわかります。確かに、「なれいしむかしの床のあはれさはみるも涙のたえぬなけきそ」という和歌の句の頭文字を連ねれば、「な・む・あ・み・た」になります。元禄九年に、乾山は三十四才であり、鳴滝に乾山窯を開く三年前にあたります。この深省を乾山とするには、未だ検討を要しますが、「六首歌」を考える上で興味深い資料です。同書には、元禄七年の収録にあたる巻十七にも、深省の和歌三首と漢詩一篇が収録されています。和歌はともに「花参差」を歌題にし、「白糸と見しはなみ木の桜花 はな入みたるみよしの山」、「たちならふ花も盛の色見せて 枝さしかはす春の桜木」、「みわたせは谷より峰に咲きみちて 枝さしかはす花盛かな」であり、漢詩は、「賀祝一詩尤識尊欲報酬和短才存 影光窓外園城月 亮旭字成照寺門」の七言絶句です。(中部義隆)

乾山筆 「六首歌」(大和文華館)



季刊 美のたより No.163

平成20年7月4日

発行 大和文華館